

# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市内1丁目15番23号 TEL 0952 (24) 3947

№.90



## 楊柳観音像

四一九・四二四・四二二

高麗時代

至大三年(二三〇) 唐津市・鏡神社

楊柳観音像は、新羅以来の洛山聖窟信仰を背景として朝鮮半島で多く制作され、この絵のように合掌する童子を描き添えるのは、善財童子の参問の景を添えたものと思われる。

観音の裾や童子の顔などにみられる淡紅色の朱具や観音の腹帯を飾る唐草文の花に使われる紫色、あるいはペール状の藍羅を透明に表現する技巧、金泥を多用する文様の描き込みに代表される精緻さは、わが国の仏画にはみられず、高麗仏画の特色を伝えている。

至大三年に忠宣王の妃が発願し、金佑文、季桂、林順、宋連色、崔昇ら宮廷画院の画師八人が描いたことが知られており、鏡神社には明徳二年(二三九)に僧良賢により寄進されている。

観音像のやわらかい姿勢が持つ量感や型にはまらない文様の自然らしさは、他の高麗仏画とくらべても抜きん出ており、巨大な一枚画絹に描かれることも考え合わせると、宮廷画院での制作があらためて納得される。

## 目次

○楊柳観音像	表紙
○誌上展覧会「佐賀の名宝—いろとかたち—」展	2～7 P
○行事のお知らせ	8 P

佐賀県立博物館開館20周年記念

## 佐賀の名宝—いろとかたち—展

主催	佐賀県立博物館	観覧料	大人 510円 (410円)
会場	佐賀県立博物館		大・高生 250円 (150円)
会期	平成2年10月6日(出) ～11月4日(日) 月曜休館		中・小生 150円 (100円)
講演会	期間中3回実施	図録	B5版・168ページ 領価 2000円

博物館では、これまで各分野で「佐賀の歴史と文化」を追求してきました。このたび開館20周年にあたり、それらを集成する意味で佐賀にかかわる文化財を中心とした「佐賀の名宝」展を企画しました。文化財の「用と美」のうえから、佐賀の文化の特色を探ろうとするものです。

古くより佐賀は文化の十字路としてすぐれた文化を導入し、また、育ててきました。この伝承された文化財を県内外から一堂に集め展覧します。佐賀の文化がどのような特色をもっているのかをご理解いただき、また、その「いろ」と「かたち」を楽しんでいただければと存じます。

主な出品資料 ◎重文 ○県重文

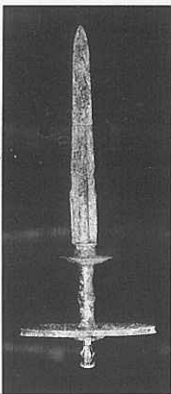
## 考古

神埼町・三田川町・吉野ヶ里遺跡出土品

## 弥生時代

佐賀県教育委員会  
吉野ヶ里遺跡は、脊振山系から南に派生する舌状台地において、神埼郡神埼町・三田川町に跨がって所在する。吉野ヶ里丘陵全体に弥生・古墳・および奈良時代の遺跡が存在しており、古来から重要な地域であったことを示現している。

環濠集落に囲まれた墳丘墓がその北端に位置し、南北約30米・東西40米の楕円形を呈し、版築の手法を以て高さ



有柄細形銅剣

約2.5米に盛土されている。この墳丘墓から八基の甕棺墓が確認され展示資料の出土を見た。

有柄細形銅剣とガラス製管玉はセットで出土し、この銅剣の祖型を朝鮮半島に求めながらも一鑄式の手法をとる。この管玉の原料は中国江南地方に求められるが総じて新たな問題を提起した。

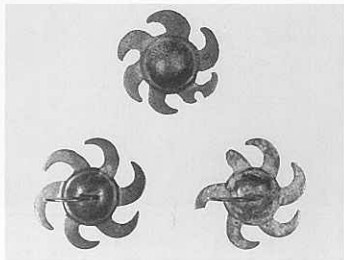
## ◎唐津市桜馬場遺跡出土品

弥生時代 佐賀県立博物館

桜馬場遺跡は唐津市街を形成する唐津砂丘上の唐津市桜馬場4丁目に所在し、弥生時代には南側に町田川が形成する沼池地に接し、北側は唐津湾に続いており大陸との接点を形成する地域である。

昭和19年(1944)待避壕穿閲地として工事中に甕棺墓が出土し、下壘から青銅鏡2・銅剣26・巴形銅器3・ガラス製小玉1及び鉄刀片1個が確認された。この一帯は当代の共同墓地である。

鏡2面は中国の「新」から「後漢」時代に製作されたものと考えられる。銅剣はゴホウラ製貝銅を模造した腕飾り、巴形銅器はスズガイを模した装飾品で、ともに我が国で鑄造されたものであろう。



巴形銅器

○三角縁三神三獣鏡 伊万里市志路寺古墳出土  
古墳時代 伊万里市教育委員会

志路寺古墳は伊万里市二里町大字大里字平沢尻に所在する復元全長約80mの前方後円墳である。昭和27年採土工事に伴って内部主体の礎床上から本鏡の他鉄剣、鉄刀、鉄 鍬が出土している。

本鏡は不時の出土にもかかわらず完形を保っている。内区は有節重弧文鈕座を中心として、素乳によって区画された6区内に神像3体と獣形3体を交互に配している。内区外周には外向鋸歯文の界線を隔てて竜・獣・双魚・蛙の4種の図形を2個ずつ配置した獣文帯と節歯文帯を巡っている。さらに1段高くなった外区は鋸歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯の構成となり特徴的な三角縁に終わる。

本鏡は京都府百々ヶ池古墳出土鏡と同范で三角縁神獣鏡の分布の西端に位置する点でも重要である。



三角縁三神三獣鏡

書 跡

○梵網經 懷良親王筆

南北朝時代 三田川町・東妙寺

梵網經は菩薩の階位と戒律に関する根本教典で、わが国には奈良時代に中国より伝えられた。戒律のなかで孝行心についても触れており、奈良時代には聖武天皇の御母追善のために梵網會がこなわれた。

この經も、後醍醐天皇の皇子で南朝の征西將軍として活躍した懷良親王により、母靈照院の忌に際してその菩提を弔うために書写されたもので、弘安の役の際に異敵降伏の勅願により創建され、南朝方の篤い帰依をうけていた東妙寺に納められた。

この時期南朝方は、九州探題今川了俊により劣勢に追い込まれており、懷良親王は將軍職を良成親王に譲って筑後矢部の山中に退隠していたといわれる。

經卷の本紙は金泥で界線を引き、天地に金銀の切箔、砂子を散らす豪華なもので、經文は端正な書体で書かれている。懷良親王の宮廷人としての一面を窺うに足る華麗な優品である。



梵網經

彫 刻

○聖觀音立像

平安時代 三田川町・東妙寺

東妙寺とは田手川をはさんで対岸にあった妙法寺の本尊であったと伝える像である。妙法寺は13世紀中頃の草創になるとされる尼寺で、鎌倉時代末期頃には七堂伽藍を備えた大寺であったことが東妙寺並妙法寺境内図より知られる。元亀元年(1570)の大夫氏の兵火に遭い、本像は難を逃れて小堂に安置されていたが、明治7年(1874)の佐賀の役に再び罹災した際に東妙寺に移されたという。



聖觀音立像

像は桧材の一本造りで内削りはない。光背、持物、台座はすべて後補。条帛部分の渦巻状の衣端や翻波式の衣文あるいは厚みのあるたつぷりとした体軀などは平安初期彫刻に通じるものであるが、極端なデフォルメはなされず、均整のとれた柔らかみのある像容から、10世紀頃後半から11世紀前半の制作になるものと考えられる。木彫像としては佐賀県内最古の遺品であり、保存も良い優品である。

ふげんてんめいぼつぎょうしよぶつぞう  
◎普賢延命菩薩騎象像

鎌倉時代 佐賀市・竜田寺

銘文より、慶派の仏師康俊により正中3年に制作されたことの知られる像である。康俊は慶派正系の仏師で、現存作品と記録より、正和4年(1315)から応安2年(1369)にかけて13の造仏活動が確認されている。

菩薩像は桧材の寄木造りで漆箔をほどこす。蓮華座に坐し、それをまた四頭の白象が支えている。頬の豊かな張りや力強く伸びる鼻梁が形づくる端正な面立ちには慶派の正統的な作風がみられ、鎌倉時代末期以降に仏像彫刻が衰退していくなかで、伝統的な力の根拠さを感じさせる。

九州には康俊の作品が本像の他に2点残されている。大分県永興寺の四天王像と宮崎県大光寺の文殊騎獅子像及び四侍者像であるが、前者は西大寺末の大安寺像の、後者は西大寺像の模刻であり、かつ永興寺はかつて西大寺末寺であった。本像を伝える竜田寺も真言律宗であり、西大寺末寺である。この3つの事例は、康俊と西大寺との関係とともに、西大寺と九州の末寺が密接に関わりあっていたことを示している。本像のような麗美な仏像が佐賀の地に伝えられるのも、こうした近畿と九州の仏教文化交流のひとつの成果といえるだろう。



普賢延命菩薩騎象像

たにざんぜんしよぶつぞう  
◎円鑑禪師像

鎌倉時代 大和町・高城寺

円鑑禪師すなわち蔵山願空は、天福元年(1233)

の正月に生まれ、長じて万寿寺(佐賀県大和町)の神子栄尊のもとで剃髮出家した。のちに栄尊とともに上洛し、その勧めにより東福寺の円爾弁円(聖一国師)のもとで3年にわたって研鑽を積む。さらに関東にくだって健長寺の闍溪道隆の門下に入るが、ここで執権北条時頼の知遇をうけ、その援助により入宋し、経山、太白山などを歴参した後、在宋10年にして帰朝、再び東福寺に戻った。文永7年(1270)に高城寺を開き、筑後承天寺を経て、正安2年(1300)、勅により都へ招聘され、東福寺第6世となった。延慶元年(1308)5月9日、東福寺双輪庵で示寂。

修理による解体時に、頭部から般若心経、梵字宝篋陀羅尼、墨書等が発見され、禪師が正安2年に高城寺を離れる際、その徳を慕った門弟達により造立されたことがわかる。禪師68歳の姿を写しており、確証の得られることの少ない、生前造立のいわゆる寿像として貴重である。木寄法に特徴があり、1本の丸太から取った最大辺22cmほどの台形の木口をみせる桧を基本材として用いている。原本を無駄なく使用するための製材、木寄法と思われるが、同様の技法をとるものは少なく、鎌倉市寿福寺の栄西像が知られる。

円鑑禪師の肖像彫刻は、東福寺永明院にも伝わるが、それは禪師の7回忌にあたり制作されたもので、生前の姿を写した本像の方が、複雑で微妙な表情や体軀の質感などに優れた迫真性を持ち、円満その印象は禪師の内面をよく伝えている。



円鑑禪師像

## 絵画

### 善財童子歴参図

李朝時代 武雄市・広福護国禅寺

善財童子歴参図とは、善財童子が文殊菩薩から指示を受け、諸々に54の善知識をたずねて教えを請い、最後に普賢菩薩に参じて仏法の大道を会得しおわるという説話を絵画化したもので「華嚴経」入法界品にもとづく。

本図は、画面を上、中、下に分けて、それぞれ歴参のうち、第十二参の善見比丘、第十参の勝熱婆羅門、第十一参の慈行童女の3景を描いており、現在は1幅のみがのこるが、もとは18幅をもって全体を構成していたことが想定される。歴参図は、中国、朝鮮、日本において制作されたことが知られるが、



善財童子歴参図

本図のように、3景を1幅におさめる画面構成をもつ作例はしられず、また図像的にも独自の系譜をもつことが指摘されている。

墨描線を主体として淡い彩色をほどこす本図には、端雲や衣にみられる紫がかかった朱色、曲線を連ねて描く端雲の形態、衣服の文様にみられる細部描写への執着など、朝鮮仏画の特徴がみられる。高麗仏画の濃厚な彩色、華美で繊細な趣味とはことなり、また李朝中期以降の形式的硬化にはおちいっていないことから、本図の制作時期は李朝前期頃と思われる。

經典見返し絵などに歴参の一部をモチーフとするものを除くと、善財童子歴参図を描く朝鮮仏画としては唯一の例である。

統一新羅時代の義湘や元曉、高麗時代の義天などの高僧を輩出し、朝鮮半島の華嚴経学には長く深い伝統があった。そのような伝統の継承の証しとしても本図の持つ意義は大きい。

### 山水図襖 谷文晁筆

江戸時代 文政3年(1820)

昭和63年、佐賀市内の旧家より発見され、文晁のなかでも最大級の作品として話題となった。発見当初、表装された形跡のないマグリ12枚の状態であったが、その後、本来意図されたと考えられる襖形式に表装された。

本図が制作された文政3年は、文晁58歳にあたる。繊細な情趣をたたえる前半期に対し、「鳥文晁」と称される後半期に属し、どちらかといえば垂直的に積み上げるような構成を好んだ文晁にあって、とりわけ横長の画面に、雄大な山水景観を描出する。右側の岩は狩野派を劈躰させ、中ほどの島をなす山は主



山水図襖(部分)

に墨の濃淡で立体感を出し、左側の握り拳のような岩山は力強さに溢れ、それぞれ表情を異にする。太めの濃墨線を主体に、外暈による霞の表現など、墨および代赭、緑青、白練、藍などの色彩の濃淡を効果的に使い分けている。筆致は、大胆なほど奔放にして、画面全体としては、むしろ瀟洒な雰囲気さえ感じられる。本図は超大作にして、後半期を代表するに足る優品といえよう。

谷文晁(1763-1840)は、松平定信に認められ画才を発揮し、江戸画壇に君臨した。漢画は勿論のこと、大和絵や南画さらには西洋画まで多様な画法を研究し、独特の画風を確立。開明的な指導者でもあり、多くのすぐれた門人を輩出した。

本図の伝来は不明だが、当時文晁と交流のあった古賀精里、草場佩川など佐賀の人物を介してもたらされた可能性も考えられる。

## 工芸

### ○溝・日輪文打出五枚胴具足

江戸時代 佐賀県立博物館

銘 兜鉢「享保三年三月吉日宮田勝貞(花押)」  
 裏「宮田勝貞(花押)」

兜は62間の筋骨で前立は切金の御幣型。鞆は板札黒漆塗を三段下り素懸。頬当は隆式頬で垂れを仕付



溝・日輪文打出五枚胴具足

ける。胴は銀錆地5枚胴で中央に溝・日輪を打出し裏は金白塗塗り(右下に「享保三年三月吉日 宮田勝貞」の銘がある)。袖は錆地の板物3枚割の蝶番付で7段下りを箆手に仕付ける。箆手はねじり冠板3枚の蝶番付。草摺は8間で板物3段下り素懸。佩楯は瓦札綴の菱縫4段仕付。脇当は8本藤金鎖繫ぎで山形立拳に菊花文をおいている。

肥前の胄甲師宮田家は、慶長19年(1614)鍋島勝茂が宮田貞俊を城下の岸川町(現伊勢町)に召抱えてより幕末まで甲胄の製作にあたった。この派の鎧は「肥前具足」と呼ばれ鉄錆地の打出胴に草摺が板物3段素懸を特色とする。この具足は5代勝貞の1具揃いで、堅牢で重量感があり肥前具足の典型を示す。諫早鍋島家伝来のものといわれる。

### ◎染付白鶯図三脚皿

江戸時代 佐賀県立九州陶磁文化館

鹿耳鍋島家伝世の尺皿は佐賀県重要文化財(工芸品)から、平成元年6月重要文化財に昇格したもので、延宝年間(1673-80)に大川内山(現伊万里市大川内町)に移され完成期を迎えた鍋島藩窯を代表する逸品といえる。極淡い呉須を濃筆にふくませて塗り重ねる筆むらのない背景の薄濃技法、素地のままの白磁で3羽の鶯を表現する呉須の線書き、口縁部に残る白い輪郭線、蓮葉の配置まで計算された表の構成、蓮華に似た木蓮風の折枝を描いた裏文様の白と藍の対比は、素材と表現の巧み、焼成技術の高さなしにはむずかしい。佐賀平野のどかな風物を、端正にまとめて格調たかい。



染付白鶯図三脚皿

## 能 面 (三日月)

室町時代

神物の神舞物「高砂」などで神に使用するのが本筋である。「弓八幡」「養老」にも使用する。三ヶ月とも書く。「月」は「ニクヅキ」のことをさすので、三ヶ月は三昧の神を一括した神の面と解釈できる。また三日月は、室町末期頃の創作者・福来の作と伝えられるものに三日月形の刻印があるため名付けられたともされる。全体に淡いめの黄土色で、稜のたった眼には金具が嵌入され、しかもその周囲には朱がそそがれている。ただ、いわゆる鳩目で横長に細い形状は、三日月として変形といわれなければならない。頬骨をやや突き出し、眉毛・髭・顎鬚の毛描きもなかなか力強い。だから冠型こそ見られないが、全体的に鋭さと烈しさが際立っていて、神の強爽たる威風は十分表現されていると言ってよい。本面の作者が南北朝期の創作者・赤鶴吉成であることを、大野出自家5代目の面師出目満昆と喜多家11代目の能役者喜多七太夫(古能)の2人が極めていたが、本来三日月など神として使用された怨霊系の面は室町初期頃完成されてくるものであり、実際は赤鶴作とは断定できない。そもそも赤鶴は「申楽談儀」にあるように鬼神系の面を得意とした作者であり、「三日月」面の相貌および性格が鬼神系のそれに近いことから、極めの時点で価値を高める意味で赤鶴作としただろうことが推測できる。なお、本面の材質が樟であることは、すなわち創作期の古面であることを意味する。



能面(三日月)

## その他の主な出品資料

### 考 古

- ◎東春振村・上峰町二塚山遺跡出土品 弥生時代 佐賀県教育委員会
- ◎東春振村三津永田遺跡出土品 弥生時代 佐賀県教育委員会
- ◎北茂安町桃見谷遺跡出土中広形銅矛 弥生時代 文化庁
- ◎佐賀市熊本山古墳出土品 古墳時代 佐賀県教育委員会
- 浜玉町南山玉古墳出土品 古墳時代 東京国立博物館

### 書 跡

- 龍馬楽譜 平安時代 鍋島報效会
- ◎東遊歌神楽歌 平安時代 鍋島報效会
- 法華経 高麗時代 鍋島報效会

### 彫 刻

- ◎帝釈天立像 平安時代 牛津町・常福寺
- ◎薬師如来坐像 平安時代 牛津町・常福寺
- ◎薬師如来坐像 平安時代 玄海町・東光寺
- ◎不動明王および二童子像 平安時代 娘野町・永寿寺
- ◎四天王立像 鎌倉時代 武雄市・広福園神社

### 絵 画

- ◎楊柳観音像 高麗時代 唐津市・観神社
- ◎見心来復像 元時代 鳥栖市・万歳寺
- ◎東妙寺並妙法寺境内図 鎌倉～南北朝時代 三田川町・東妙寺
- ◎肥前名護屋城廻廊風(伝狩野光信筆) 桃山時代 佐賀県立博物館
- 有明海漁業実況図 江戸時代 佐賀県立博物館

### 工 芸 品

- ◎銅 鏡(肥前鏡) 南北朝時代 相知町・医王寺
- ◎太刀 朱銘 國行 鎌倉時代 鍋島報效会
- ◎絵唐津松樹文大皿 江戸時代 梅澤記念館
- ◎陶彫赤絵豹犬 江戸時代 有田陶磁美術館
- 鼻高面 鎌倉時代 呼子町・旧島神社

〔総件数〕……………89件

国 宝……………1件

重要文化財……………22件

佐賀県重要文化財……………34件

## 記念講演会

第1回 10月6日(土)午後2時

「葉隠の思想系譜について—現在の只今に生きる—」  
当館初代館長(葉隠研究会会長)

古 賀 秀 男 先生

第2回 10月13日(土)午後3時

【佐賀の仏教美術】

北九州大学教授 錦 織 亮 介 先生

第3回 10月27日(土)午後2時

「経塚と写経—春振山出土品を中心に—」

東京国立博物館有史室長 関 秀 夫 先生

## 行事のお知らせ

### 企画展

展覧会名	会期	会場
美術館への道程展 —いかにしてコレクションは形づくられたか—	9月28日(金)～10月21日(日)	美術館
佐賀の名宝—いろいろとたち—	10月6日(土)～11月4日(日)	博物館
高等学校美術選抜展	10月23日(火)～10月28日(日)	美術館
第14回高等学校美術祭書道展	10月31日(火)～11月8日(木)	美術館
第13回さが行動展	10月31日(火)～11月4日(日)	美術館
第40回佐賀県美術展	11月17日(土)～11月25日(日)	博物館・美術館
第31回佐賀県学童美術展	11月27日(火)～12月2日(日)	美術館

### 美術館特別展

## 美術館への道程展 —いかにしてコレクションは形づくられたか—

主 催 佐賀県立美術館 会場 佐賀県立美術館 会期 平成2年9月28日(金)～平成2年10月21日(日)

観覧料 大人200円(150円) 大・高生150円 中・小生70円(50円) ( )内は20名以上の団体

佐賀県立美術館は県立博物館の美術資料を基礎として、昭和58年に開館いたしました。その後も日本近代洋画を中心に資料収集を重ねてきましたが、この度博物館開館20周年を迎えるにあたりそのコレクション形成の過程を振り返るべく、館蔵の名品を一堂に配しての記念展を企画しました。

彫刻家の古賀忠雄、工芸作家の鈴木照次・豊田勝秋、日本画家の池田幸太郎・下川千秋・立石春美、そして本館所蔵資料の中核を占める百武兼行・久米桂一郎・岡田三郎助・藤島武二・小代为重・高木青水・北島浅一・山口亮一・武藤辰平・松本弘二・江口良・石本秀雄・納富進・古沢岩美・池田龍雄などの洋画家達。彼らの各時期を代表する作品の数々をどうぞこころゆくまでご堪能ください。



「花野」岡田三郎助 1917(大正6)年

博物館・美術館報	第90号	発	行	佐賀市内1丁目15番23号
発行年月日	平成2年10月1日			佐賀県立博物館
編 集 出 和 人		印	刷	佐賀県立美術館 館 大 同 印 刷